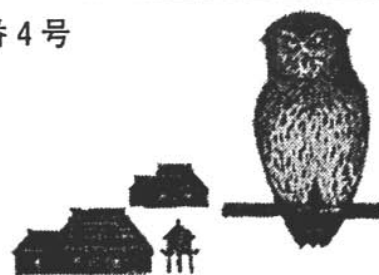


コタンメール

第25号

平成18年3月15日 発行



CD、DVD
楽譜つき

『西平ウメとトンコリ』刊行 ～その日からトンコリ演奏ができる～



『西平ウメとトンコリ』

演奏 CD、解説 DVD

『西平ウメとトンコリ』を刊行しました。

本書は、トンコリ奏者西平ウメさんのあゆみ、トンコリの歴史や代表的な製作者の紹介など、今年度を実施した同名の企画展の内容を盛り込んだ解説書です。また、会場で流れていた西平さんの演奏、トンコリ製作と演奏の解説映像をCD・DVDの形で収録しています。さらに練習用の楽譜も付属し、1冊でトンコリの歴史・製作・演奏を知ることができるよう意図して編集しました。

本書は、ミュージアムショップ イカラカラにて1冊(CD、DVD付) ¥9,800(税込)で販売いたします。

また、練習用のトンコリも1本 ¥8,000(収納袋付)で販売いたしますので、購入ご希望の方は博物館までご連絡ください。

(木田瑞恵)

「勉強になった」「他の人にも伝えたい」アイヌの食文化講座

3月11日(土)と12日(日)の二日間、アイヌの食文化講座を行いました。

11日は「伝統的な食材を使おう！」をテーマに大須賀るえ子さんが講師となり、キハダの実や、オオウバユリの澱粉、ギョウジャニンニク、鹿肉といった、伝統的に使用されてきた食材を利用して料理が作られました。

村木学芸員と倉部職員が講師を務めた12日は「お茶と薬編」で、チョウセンゴミシやキハダの樹皮、フッキソウ、スギナ、ナギナタコウジュを煎じたお茶の試飲をし、効能を学びました。また、ジャガイモを搗りつぶし、団子にして入れたお粥と、実そばのお粥を作りました。

この講座は最終回を迎え、参加者からは、「この講座で学んだことを吸収し、他の人にも伝えたい。」「今回の受講を機に、アイヌの食文化の勉強を今後も続けていきたい。」などの感想が寄せられました。また、「次回は使用する山菜などの食材採取から作業を始めたい。」との要望もありました。

参加者の中には栄養学を学んでいる方がおり、現代の食生活の中での栄養の摂り方について、伝統的な食材利用を学んで、それを栄養学に応用しようとしているように見受けられました。

(木田瑞恵)



アシリ カンピソシ エクナ (新しい本が来たよ)

『人類館』 演劇「人類館」上演を実現させたい会 編、(有)アットワークス (¥2,310 税込)

人類館という施設を御存知でしょうか。昨年5月、この施設を取り上げた本が出版されました。新刊というには少し間が空いてしまいましたが、今回はこの本を御紹介したいと思います。

「展示された側」の子孫達

1903(明治36)年、大阪天王寺で第5回内国勸業博覧会が開催されました。この博覧会では、アイヌ、沖縄(琉球)、台湾、インドといった地域の「生きた人間」が「展示」されました。本書は、沖縄県出身者を中心に「展示された側」の子孫達によって編まれたもので、展示を行ったパビリオン「人類館」についての事実関係、展示内容とそれに対する反響の中にも含まれる問題を、資料にそって丁寧に掘り起こしています。アイヌの展示については長谷川由希さんが詳しく報告しています。

「人類館」のねらい

「人類館」の展示にはアイヌや沖縄のほか、朝鮮、清(中国)も含まれる予定でした。これらの地域は、日本が新しく「獲得」した領土、あるいはこれから手を伸ばそうとしていた地域の住民です。こうした人々を集めて見せることによって、見学者に「日本の領土はこんなに広がった」「これからますます勢いを増す」と感じさせることが目的だったと言われています。また、展示の仕方は、その人々の暮らしが「奇妙なもの」「遅れたもの」に見えるように仕組んでありました。それらを見た人々(多くは日本人)が、展示と自分達を比べて「自分達はずいぶん文明的だなあ」「自分達が未開人を導いてやらなければ」と感じるための仕掛けだったといえます。見学者は、展示を通じて植民地主義(侵略)を受け入れ、同時に差別意識を持って帰ることになります。本書では、この展示を作ったのが当時の人類学者であったことを指摘しています。

「差別は誰にでも手の届く墮落した楽しみ」である

本書のもう一つのテーマは「沖縄人による差別」です。「人類館」の展示が始まると、沖縄の人々から「同胞への侮辱だ」という猛抗議が起こりました。当然のことです。しかし、抗議の内容は「我々(沖縄)をアイヌや台湾と同列に扱うな」というものでした。「沖縄は(差別を受けないよう)内地のレベルに近づこうと努力しているので、アイヌや台湾とは違う」という趣旨の意見もありました。日本人による差別の苦しみから逃れようとする一方で、差別を重ねているのです。これでは、差別の理由を問題にしているだけで、差別の存在そのものは認めることになってしまいます。執筆者の1人、野村浩也さん(沖縄県出身)は、差別に打ち勝つ険しい道を選び、自分より弱い者を見つけて安心するのはとても安易である、と先人達を厳しく批判しています。私は、野村さんたちの姿勢に衝撃を受けました。

翻ってアイヌに目をむけると、アイヌもまた弱者を差別し、あるいは無神経な多数者として振舞うことがあります。今日でも、アイヌが、在日コリアンや、被差別部落民、障害者をさげすむのをしばしば目にします。しかし、アイヌが自らを語る時は、常に差別された側の立場であって、野村さんたちのように自らの過去を厳しく見つめた発言はほとんど見られません。野村さんの言うように、誰かを差別することは、結果としてアイヌへの差別をも生き永らえさせることになります。本書に込められた野村さんたちのメッセージは、私達自身について考え直すよい機会になるのではないかと思います。(北原次郎太) ※『人類館』はミュージアムショップにて販売しております。